

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

# 国文研ニュース

No.13  
AUTUMN 2008



『源氏物語団扇画帖』

## 目次

### ● メッセージ

立川市からの文化発信(2) ..... 1

### ● 研究ノート

記号の盆栽 井田太郎 ..... 3

クアラルンプールで考えたこと —アーカイブズと編集— 渡辺浩一 ..... 5

シンポジウム報告 オランダと日本 —文化的<対話>の軌跡— 入口敦志 ..... 8

### ● トピックス

第1回日本古典文学学術賞の受賞者決定 ..... 10

子ども見学デーの報告 ..... 12

立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」の開催 ..... 13

新収資料紹介 ..... 13

総研大日本文学研究専攻 特別講義 ..... 14



## 立川市からの文化発信（2）

対談

館長 伊井 春樹  
立川商工会議所会頭 萬田 貴久



### 前回からの続き

**萬田** 私どもも、日本の文化と伝統、こういったことは、今、やはり若い人がそれを受け継いでもらわなければ困るわけですし、それから、同時にグローバルと言っても、世界に出ていく中で、やはり誇れる文化を持っている日本が、それを今度は若者が出ていって、それを語れるような、そういった人になってもらいたいなと思っているわけですよ。ですから、そういうようなことでは、やはりそういう日本の文化・伝統の1つである活字文化、源氏物語等の、これは世界最古の長編物語というふうになっていきますけれども、そういうようなものとか、それから日本の文化を豊かにしていく仮名文字ですね。平仮名、片仮名、こういったもの等についての中で、日本の文化が本当に幅広く、本当に庶民文化にまで浸透して、江戸時代の元禄文化を作り上げたのではないかな、というふうに受け止めておりますけどね。そのあたりは、ぜひこちらの施設をいろんな形で利用させていただくと同時に、こちらからも、また、いろんな形でご提案をしたいというふうになっております。

今、私どもも1つは生涯教育の一環として、例えば、昭和記念公園でも、1,200人以上のボランティアの方が、草刈のお手伝い、あるいは花の苗の植えつけだとか、それから、いろいろ公園の清掃だとか、こういったことに携わっているのです。皆さん、ボランティアで。立川は大変ボランティアの団体が多いのです。NPO法人だけでも70ありますので、ですから、そういう方々の参加も得られると思います。

あと、市民交流大学というのが、去年から立ち上がっておりまして、そこにも古典に関する講座で、しかも地元の方で、いったん退職された方が講師になって、ほぼ無料に近い500円、何回かで3000円というような上限を設けていますけれども、そのような講座もありまして……

**伊井** それは生涯教育という中でやっていらっしゃるんですか。

**萬田** そそうですね。ですから、古典で伊勢物語を読むなんていうことだとか、それから、文集の教室だとか、仏教の美だ

とか、こういうようなのが始まっているのです。それから、立川は朝日カルチャーセンターがあります。国文研の教授の方もそれぞれ出ておりますよね。そういうようなこと等もありますし、やはり新しい国文学のそういった内容を持った施設がここできたわけですので、そここのところは、今までの既設の、それとまた違った意味で、役割を果たしていただければなと思っております。ちょっと、これは先ほどの日本の文化・伝統を伝えるというのと、また違うのですけれども、やはり地域の特に多摩地域ですね。多摩地域というのは、いろいろな地域によって構成されています。徳川時代から狩場があったりして、よく武蔵野の雑木林と言われますけれども、必ずしも雑木林だけではなくて、原っぱとか……

**伊井** 草原みたいな……。

**萬田** 草原みたいな、そういう場所でもあったんですね。国木田独歩の「武蔵野」なんか見ますと、雑木林の並木というふうに書いていますけど、そればかりではなかったんですね。そういう中で、玉川上水は東京の水がめと言われましたし、もう1つは宿場という、甲州へ渡る宿場ですね。例えば、青梅だとか調布だとか、そういった宿場がありましたので、いろいろ人の交流が激しかったわけです。そういうようなことで、それぞれの地区に多摩地域の中でも郷土資料というのが結構あるのです。多摩信用金庫で「多摩の歩み」という季刊雑誌を、もうこれは昭和50年に創刊され、ずっと出されておまして、これは郷土史の掲載をずっと続けているわけで、これを多摩信は電子データ化することを考えているようですけれど、ぜひ、そういうところのご協力なんかもちょうといただければ大変ありがたいのでは。私も多摩信の役員を去年まで15年間務めていましたので、そういった郷土資料の収集、あるいは保存等についても興味を持っています。

さっき申し上げた市民交流大学でも各種講座を持っていますけれど……

**伊井** そこと何かうまく共催してね、こちらでも会場がいろいろありますから、こちらでやるとかね、これについてはここでや

るとかね、というふうに……。

**萬田** そうなんです。で、立川の場合には、昔の公民館が今、学習館になっているんです。市民交流大学構想というのは昔からあったんです。で、ようやく、学習館という形で去年からスタートしていますので、ぜひそういったことで、さっきの生涯教育の一環として考えていいのではないかと考えているわけですが……

それから、ここはちょっと立川市に限ったことではないのですが、多摩地域には自治体が26市3町1村ですかね。そういう自治体ですから、各市等に、立川で言えば、立川市歴史民族資料館、こういうのがあるわけです。あるいは、ほかの町では博物館になっていたり、いろいろありまして、そういったところの等の把握と、何か連携がとれたら、いいのではないかなと思ったり、それから、あと古典芸能とか、そういうものを、やっぱり市民会館等と連携してやるとか、そういうことなんかどうなのかと思ったりしております。

それから、多摩地区は大学と短大と高専をいれて76校あるんです。で、今、その40校くらいの大学でネットワークを構築して、大学連携という形で、単位の取り合いなんかもある、そういった連携もありますけれども、そうじゃなくて、私がちょっと今、申し上げたいのは、そのネットワークの事務局は明星大学にあるんですけど、その出先機関が立川の南口にあるんです。「学術・文化・産業ネットワーク多摩」というのですが、

実は、そこで知のミュージアムという形で、多摩・武蔵野検定を行うということを発表しておまして、これは第1回が10月26日に行くことになっています。ダイヤモンド社からテキストが出ています。これなんかもちょうと見ていただくと、結構、多摩の歴史、あるいは多摩で輩出した作家だとか、その当時の古文書だとか、そういうもの等も若干触れておられますので、そういう出題だとか、そういったときのご協力なんかもしていただけたらいいんじゃないかと。私もその委員になっています。会長さんは首都大学東京学長の西澤潤一先生が



就任されています

**伊井** 元東北大学の……。

**萬田** そうですね、で、専務理事が中央大学の細野助博教授で、首頭を取ってやっています。あと、多摩地区では、それぞれの地域にCATVが4つあるんです。立川の場合にはマイテレビということで、国立や昭島や武蔵村山、それから東大和、こういった地区で見られるマイテレビというのがありまして、それも商工会議所が出資していますので、私は役員になっています。そういったテレビを使ってみるのもいかがでしょうか。先生は今、NHK第2放送でやっていますよね

**伊井** よく御存じで……。

**萬田** 全国放送とはちょっと違うんですけど、館長さんじゃなくて、先生方……

**伊井** いっぱいいらっしゃいますから……。

**萬田** いろいろ専門、専門でやっていたくなんていることも、今後はあったっていいんじゃないかなと思ったりしております。それから、先日お連れした「花みどり文化センター」の館長・椎名豊勝さん（立川観光協会会長）、さっきお会いしていたのですけれど、椎名さんのお話によると、この前、昭和記念公園で庭園を見ながら短歌をつくる、そういった短歌教室を、サンケイリビングの協賛をいただいてやったそうなのです。初めてだったので、そんな大勢ではなかったらしいのですけれど。ただ、そういうことだとか、それから、要所、要所に日本庭園の部屋のところに短歌を作ったら、そこに投げ込んでもらえるような短歌ポストが置いてあるそうです。結構、そんなことを好きな方だとか、そこに行った方じゃないとわからないことだと思いますね。それから「花みどり文化センター」は商工会議所から歩いて3分くらいで行ける場所なんですけれど、駅から歩いても大変近いわけです。

で、あそこはぜひ使ってくださいというように館長さんからも言付かってきましたので、活用されたいかがでしょうか。

それから、私どもの店でも、笠間書院さん等のご協力で勝手にいろいろ国文学の関連書を置かせていただいているようでして、できるだけお手伝いしたいと思います。

**伊井** これは、私も、けさ、ちょっと写真を撮らせていただいたのですが、こういうふうにしていただいて、国文学研究資料館フェアということで、オリオン書房、ありがとうございます。

**萬田** 昭和記念公園に近いオリオン書房ノルテ店は800坪ありまして、専門書も

幅広く揃えております。そのラウンジでよく作家のトークショーだとか、サイン会とかをやるのですが、そういうときには喫茶室が壁の中に納められる施設になっていて、椅子だけでお話を聞くようなことができますので、40坪くらい大きいですけれど、使っていただければよろしいのではないかなと思っております。

**伊井** ありがとうございます。

**伊井** この夏も、いわゆる、我々は研究機関ですけども、先ほど申しましたように、一般の方々にもいろいろ広く知っていただくし、で、8月、子供見学デーというのを催しまして、そのお子さんと親御さんに来ていただいて、巻物を巻いてみるとか、昔の文字はどういう文字であったのか。そういうことを小さい子には見ていただくと、絵巻物だとか、本だとかというふうなことを毎年やっているのです。ことし、立川で初めてなものですから、そういうことも、ぜひ御協力いただきたいと思っております、教育委員会にも行ったのですけども。

**萬田** 8月27日の「子ども見学デー」のチラシは私も拝見しております。

**伊井** そういうことをしたり、連続講演をしたり、10月には連続講演をします。10月3日から、また今、この前終わりましたが、今度は源氏物語展を、絵巻とかいろいろ出しますので、そういういろんな講座だとかいたしますので、ぜひ、いろんな形でまた、先ほどいろんなネットワークをお教えいただいたので、ぜひ事務的にもさまざまな形で、御協力をしていただいて、こちらさまざまな形で御奉仕をするということで進めたいと思っておりますけども……。

**萬田** はい。そういうことは大歓迎でございますので、そういうことで、私どもでもできるだけのご協力をさせていただきますので、よろしくどうぞお願いしたいと思います。あと、立川にはFMたちかわ放送もあるんですけれど、これにどなたか出て、展示会があったときに直接インタビュー、こちらに来られた来場者の方に感想を聞くとか、そういうような取りあげ方もありますけれど、ただ、ちょっとFMは若いリスナーが多いですね。

やはりマイテレビのほうがいいですね。マイテレビの方が、そういう対象者が絞られていますから、その方がいいと思います。マイテレビは単年度黒字に変わり、視聴者も増えてきて、今、6割をちょっと超えたんじゃないでしょうか。

**伊井** ぜひ、そういうことで、いろいろ立川市及び多摩地域と、今、おっしゃって

くださったような連携をしながら、ここに来ている我々委員も、本当に緑と文化の町としての存在を高めていきたいということで、ただ、御存じのように、我々国から支援を受けてるだけなものですから、たまたま去年から、国文学研究資料館賛助会というのをつくりまして、友の会のような組織ですが、文科省から言われて、館の中に組織なんかに入れてはいるんですけども、また、そういう賛助会をいろんな企業なども、これから御紹介していただいて、少しでも賛助会の方に入っていただくようなことを、ぜひお願いできればと思っております。

**萬田** 先ほどのシンポジウムでも、1,000人以上の方に、どういう形で、こういった情報を伝播されたのですか。

**伊井** 1つは、朝日新聞の後援をいただきまして、あと、NHKだとか、いろんなところの後援がありまして、1つは朝日新聞の全国版に載ったのが大きいのだろうと思うのです。だから、地方からも随分おいでになりました。大半は多摩の立川市の方が多かったんだろうと思います。

**萬田** やはりそういうことに、特に今年は「源氏物語」ということに関心を持っていただける方が増えるといいですね。

**伊井** だから、ぜひそういう方を掘り起こして、関心を持っていただく。だから源氏に限らず、日本文化というものに関心を持っていただいて、これから近づいていただくということを、ぜひ進めていきたいと思っております。

**萬田** 立川は、お買物も 緑の自然も、アートも、人情もある多様性に富んだ町ですけども、同時にやっぱり多摩地区の中心として、半歩でも1歩でもちょっと先を行きたいということに燃えて、今、私はやはり自立した都市圏を形成する方向に、立川は向かっていると思っています。立川は地域的にもちょうど多摩地域の中心に位置していますので、交通手段が充実していること。それから、周りに大学があつて、人材も豊富だというようなこと、それから、また世界に情報を発信する情報インフラもいろいろ備えられていますので、ぜひ、コラボレーションでいろいろさせていただければ、大変ありがたいと思います。

**伊井** ええ、ぜひとも文化の情報を発信する町としてね。

**萬田** そうですね。

**伊井** ぜひ、そういうことをお願いをして……。

**萬田** こちらこそ、よろしく。

**伊井** きょうは長いことどうもありがとうございました。



## 記号の盆栽

井田太郎(国文学研究資料館 助教)

### ■名所、命銘

日本における盆栽を考えると、植物を長櫃に植えた形式では、『蜻蛉日記』に記述があり、中でも石付のタイプは「西行物語絵巻」(鎌倉時代中期)・「春日権現記絵巻」(1309奉納)などに描かれている。また、植物を盆器に植えた形式では、『続日本紀』巻八に言及があり、中でも石付のタイプは「一遍上人絵伝」(1299完成)、石なしのタイプは「法然上人絵伝」(1307制作開始)にみられる。盆栽の周辺には、正倉院宝物にある假山というオブジェや洲浜・蓬莱・庭園・盆石というものもある。盆石や茶道具には、夢の浮橋(徳川美術館蔵)・玉川(同蔵)など歌銘を与えられたもの、残雪(西本願寺蔵)・卯花牆(三井記念美術館蔵)など見立てで命銘されたもの、黒髪山(寛永寺蔵)・峨眉山(静嘉堂文庫美術館蔵)・富士山(サンリツ服部美術館蔵)など実在の景観に類似して命銘されたものなどがあって、豊かな世界を繰り広げている。

ところで、盆栽でも特定の場所に似せて作られ、名づけられたものがある。本研究では、十九世紀の大坂で刊行された二種の盆栽絵本をめくり、実在の地名を与えられた盆栽と名所の問題、〈風景の尺度〉の基準軸などについて大づかみに説き及ぶたい。

### ■墨江武禪と『古景盤図式』

墨江武禪(1734-1806)は大坂の町絵師で<sup>1)</sup>、『続諸家人物誌』(1832版)によれば「名ハ道寛、字ハ子全、一ニ心月ト号ス。通称ハ莊蔵、大坂ノ人。雪亭(ママ)ニ從テ南宋ノ画風ヲ学ブ。後ニ一家ノ風ヲナス」とあり、『浪華郷友録』(1790版)をみると別に蒙齋とも号したという。画系としては月岡雪鼎の弟子であるらしい。また、『嬉遊笑覧』は、武禪が八方からみることができる石膏製假山を作るのに長けていたと述べている<sup>2)</sup>。武禪は器用で、相当な盆栽マニアであったようだ。ただし、盆栽といっても、今日の主流である樹木と石だけで作った盆栽ではなく、フィギュアを使用するジオラマ的な盆栽である。

『古景盤図式』(1826刊)<sup>3)</sup>は武禪生前の著作ではなく、後刷本の見返しによれば「墨江武禪翁遺意」によるものという。武禪が作った中国風の景観の古景盤に、篠崎小竹など上方の文人の賛がそえられている(挿図1)。絵師は長山孔宣など



挿図1

である。地冊巻末には、古景盤に配置すべき小さいフィギュアの一覧(挿図2)が載り、古景盤の作り方が懇切丁寧に附載されている。その一節を読んでみると、「盤中置物ハ○楼・塔・亭・洞鈴・人物・漢人物を置べし。倭人物置べからず・舟・橋・水禽の類、すべて楽焼<sup>4)</sup>を佳とす」とあって、和風を排除した中国趣味・文人趣味を色濃く打ちだしている。



挿図2

### ■『東海道五十三駅鉢山図絵』

『古景盤図式』より二十年ほどあとに刊行された『東海道五十三駅鉢山図絵』(1848刊、以下「鉢山図絵」と略称)は、木村唐船<sup>5)</sup>が東海道五十三次の宿駅を鉢山<sup>6)</sup>化、歌川芳重が絵画化したものである。構成の面から判断して、『鉢山図絵』は『古景盤図式』を直接的に参照しているだろう。『鉢山図絵』に収める五十四(五十三次と大内)の盆栽は大変手がこんでいるが、文政九年刊本の『古景盤図式』に古景盤の所有者名が備わる点を考慮してみれば、おそらくは実在したと考えら

れる。もともと、「一、日本之景に唐の家がらの人物用ゆべからず／一、唐の景色の鉢山ニハ唐人用ゆべき事」(『鉢山図絵』下)とあって、日本風と中国風を住みようわけようと提唱し、中国趣味・文人趣味の強い『古景盤図式』よりはゆるやかな方向性をもっている。

ところで、大きな庭であれ、小さな鉢山であれ、こういった実景が存在する作りものを造形するとき、ある特定の場所を想起させる特徴、いうなれば名所要素の抽出を行う必要性、すなわち記号化する行為が必要となってくる。その〈もっともらしさ〉をどこに求めたのかの問題になり、そこが見立て・やつしという営為とも関係するはずである。

たとえば、『余景作り庭の図』(1680刊)をみると、「▲この庭、すみだ川ににせたるにわ也。まづ、座敷をみなミ東むきにたつるなり。まづ、泉水を嶋やりにながし、せん水の中にいわをたつる也。とりいわといふ。ミヤこ鳥をへうしたるいわなり。せん水のふちにじや柳をうへ、小山に芝をふせて、山に柳の朽木に梅をうへませせて作る。是は梅若のつかの心也」とある。つまり、隅田川に似せた庭=座敷の方角(水流の方角)+都鳥・梅若塚をやつしたもので構成するといっている。では、『鉢山図絵』のばあいには、どのような名所要素が組みあわされて造形されているのだろうか。

### ■広重「東海道五拾三次」の踏襲

『鉢山図絵』のばあいは、諸家の指摘するごとく広重の名作シリーズ「東海道五拾三次」に倣っている<sup>7)</sup>。五十三各駅の〈もっともらしさ〉は広重の連作という基準軸にそっている。認知されやすい特定の基準軸があり、それを鉢山にしている。『鉢山図絵』は「東海道五拾三次」のかたちを踏襲しているわけであるが、たとえば蒲原(挿図3)などは好例であろう。

とはいえ、木村唐船とても近接構図や風俗画的な要素が前面にでている「東海道五拾三次」のシリーズは採用していない。近接構図や風俗画的な要素が強い「東海道五拾三次」は、ある景観を記号化・縮小して鉢の中に配する鉢山というフォーマットになじまないから、もったもなことである。日本橋(挿図4)で、鈴木春信以降広く流布した富士・江戸城・日本橋というユニットを採用しているのは、広

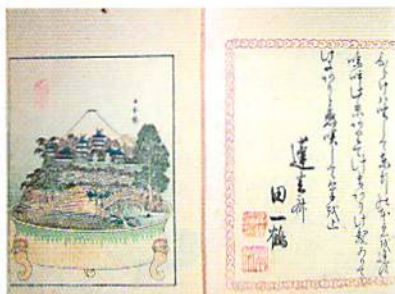




挿図3

重の近接構図では鉢山になりにくいからである。そういった宿駅では、唐船が腐心してみたり、工夫しきれなかったりしたのだろうと推測される。全くの無からかたちを造形するのはむずかしい。

広重の「東海道五拾三次」は「東海道名所図会」（1797刊）に倣ったものも少なからずあるという指摘がある。いわば、江戸において成立した東海道五十三次の見方である。十九世紀半ばに、この江戸前の〈風景の尺度〉たる「東海道五拾三次」が大坂に輸出され、「鉢山図絵」として造形されている点に興味深さを感じる。それは江戸において成立した別の〈風景の尺度〉の受容と比較すれば、より時代的な変化が浮き彫りになるだろう。一例を挙げてみれば、十九世紀の初期には江戸において確立された富士筑波という型は江戸では流通した<sup>7)</sup>にも関わらず、大坂に輸出された事例を筆者は寡聞にして知らない。



挿図4

### ■〈風景の尺度〉、東西のちがいが

以上のことから、十九世紀の半ばと後半で、〈風景の尺度〉の発信地が異なってきたのではないかという分析が可能となる。明治維新にともなうて遷都され、文化発信の一極化が進む前段階に、『鉢山図絵』は大坂で刊行された。「東海道五拾三次」を模倣しているのはあきらかである。つまり、東で形成された〈風景の尺度〉が、西に輸出され、流通している点が注目される。すなわち、江戸でできた「東海道五拾三次」という基準軸は、一定の〈もともとしさ〉を保障するものであった。それを模倣した鉢山を特定の場所として大坂でも認識させる〈風景の尺度〉として機能していたということを示す。よって、『鉢山図絵』という存在は、十九世紀の後半、東が〈風景の尺度〉の発信地へと変貌していた部分があったことを考えさせる資料と位置付けることができる。西園寺公望は「歐羅巴紀遊抜」（自筆影印・私家版による 1932）で、「議政堂／ワシントン第一の壮観なり。紫宸殿を四ツ斗重し位也」と「伊勢物語」の東下りを思わせる手つきで、ワシントンの連邦議會を京都御所の紫宸殿という公家の〈風景の尺度〉で測定したわけであるが、こういったことは時代錯誤的な滑稽とは評せないだろう。人間は身近な尺度からなかなか解放されないという寓話であり、その変化とはコペルニクス的展開なのである。

最後に巨視的な視点にたつて贅言しておくならば、『占景盤図式』・『鉢山図絵』は、江戸における園芸が品種改良（アサガオ、オモト、ショウブなど）など博物学的な方向性を色濃くもっていたのに対し、上方における園芸が作りもの的な興味の方向性をもっていたという東西の園芸の大きな差異をも観察させてくれるかもしれない。

\*1 筆者が調査させていただいた作品には「白糸の滝図」（大英博物館蔵）・「山水牧驢図」（同蔵）があり、未見の作品には「芙蓉峯細見之図」（1799ごろ 静岡県立美術館蔵）・「唐美人図押絵貼屏風」（ナールステク博物館蔵）などがある。調査に協力いただいた大英博物館のティモシー・クラーク氏に感謝の意を表す。

\*2 星野鈴氏「白糸の滝図」解説（『秘蔵日本美術大鑑 大英博物館2』講談社 1992）参照。

\*3 現時点では、文政九年（1826）刊（早稲田大学図書館蔵）と明治時代刊か（国文学研究資料館蔵）の二種が管見に入っている。両者は、①表紙の模様・②見返し・③序文の罫郭の有無・④占景盤所有者名の有無（以上、天冊）、⑤表紙の模様・⑥早稲田本にある占景盤の挿図（十丁ウ・十一丁オ）の有無・⑦奥付（以上、地冊）という七点が異なる。

\*4 ここに描かれた城・家・橋などの建築物、人物や亀などの動物の多様なミニチュアのフィギュア類については、幕臣の屋敷であった東京大学本郷キャンパス（工学部十四号館地点 SK337）からの出土例がある。

\*5 残念ながら、伝記未詳。

\*6 「盆に石を置、勝景を見るを盆山と云。殊に石を据へ、土を盛りて勝地と景色を作すを鉢山と呼ぶ。漢国にては占景盤・縮景盤といへるよし」（『鉢山図絵』上）というふうには盆山・鉢山を区別している。

\*7 鈴木重三氏「広重『東海道絵』の展開」（保永堂版 広重東海道五拾三次）岩波書店 2004）参照。

\*8 井田太郎「富士筑波という型の成立と展開」（『國華』1315号 國華社 2005）参照。



## クアラルンプールで考えたこと — アーカイブズと編纂 —

渡辺浩一(国文学研究資料館 教授)

### ■ 発端

5月の連休明けに突然一通のメールが舞い込んだ。7月下旬に国際アーカイブズ評議会(International Council on Archives、略称ICA)の世界大会がクアラルンプールで開かれ、そこで韓国国家記録院のDr. Sangmin Lee 李相敏氏が、Documentation and Archives Managements in Traditional East Asia(伝統的東アジアにおける文書作成とアーカイブズ管理)というセッションを主催するので日本からの報告者を捜している、渡辺が報告するか誰かを紹介してほしいという国立公文書館の中嶋康比古氏からの依頼であった。ICA大会は4年に一度、オリンピックの年に開かれている。今年はオリンピックが北京、ICA大会がクアラルンプールというわけである。

ちょうどアーカイブズ研究系ではプロジェクト報告書『近世アーカイブズの多国間比較』(2008年3月)を刊行し、科学研究費の成果とあわせて、東アジアはもちろんのこと、イスラーム世界や西欧とも中近世アーカイブズの多角的な比較をするプロジェクトの中間まとめを行ったばかりであったので、このプロジェクトで考えてきたことを話せばよいのだろうと思い、検討を始めた。

早速、ICAクアラルンプール大会のホームページhttp://www.kualalumpur2008.ica.org/en/sessions/documentation-and-archives-management-traditional-east-asiaにアクセスし、セッションの趣旨を読んでみると、おおよそ以下のようなことが書かれていた。

東アジア諸国、特に中国と朝鮮は、その達成を記録するユニークなシステムを持っていた。両国はまた、生み出されたアーカイブズを保存するユニークなシステムを発達させた。人類の経験を記録し保存する実践的必要性の考慮が普遍性を持つことに注意することは重要である。この普遍性のゆえに、我々は、東アジアの文書作成とアーカイブズ管理の伝統の光のもとで、現代社会における記録とアーカイブズ管理の理論と実践を検証するとき、その理論と実践を'objectify'「客観視」するこ

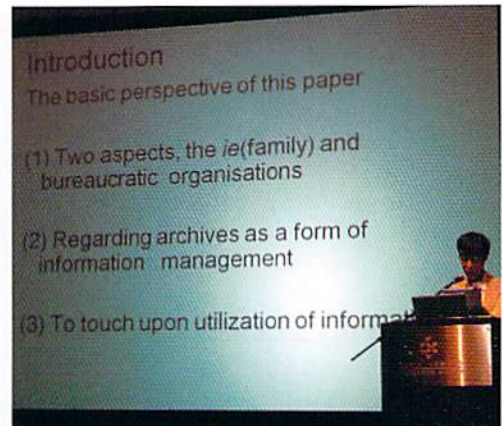
とができる。歴史的視点から東アジアの記録経験を理解することは、現在の記録・アーカイブズ管理の理論を、伝統的アーカイブズ思想の発達と普遍的な人間行為の表現として見ることに導く。この「客観視」の結果は、未来を見通す知的階梯を提供することができる。

私自身は、近代日本が多くを西欧から学んだにもかかわらず、なぜアーカイブズの制度と思想が導入されなかったのかという問いに対して、前近代日本における内在的な理由を追及することを課題としているので、やや関心は異なるとは思っていたが、とにかく交流相手を増やすことは将来プラスになるだろうと大雑把に考えて、報告を引き受けることとした。

北欧出張中のげ相敏氏ともEメールで連絡をとったところ、いただいたタイトルはPre-modern Archives and their management in Japan(日本における前近代アーカイブズとその管理)であった。ケース・スタディにすべきか概説にすべきか大いに迷うところではあった。しかし、最終的には与えられたタイトルを大まじめに受け取って、大胆にも日本の古代から近世のアーカイブズに関する概説を東アジア世界のなかで論じることとした。

### ■ 報告の準備

私は直前になって報告者に加わったので、ホームページには既に報告者とタイトルが載っていた。それは以下の通りである。Dr. Hang-Nyeong Oh 呉恒寧, 忠北大学校 "An Archival Interpretation: The Annales of Chosun Dynasty" アーカイブズの解釈—朝鮮王朝実録— Dr. Kwisun Si(漢字不明) 国家記録院, "Old Public and Private Archives: Everyday Life of People in the Medieval Korea" 公と私の古文書—中世朝鮮における民衆の日常生活— Ms. Xu Chunfeng 徐春峰, 中国第一歴史档案館, "Traditional Archives in China: Archives of Ming Dynasty and Quing Dynasty" 明清時代のアーカ



### イブズ

つまり、韓国から2本、日中から1本ずつという構成であり、朝鮮王朝実録をアーカイブズ学の立場から位置づけようという報告と、韓国からのもう1本は歴史学的な報告であることが予想された。中国からの報告は概論であることが予想された。このなかで、呉恒寧氏の報告についてはオプストラクトが既に載っていた。その内容はおおよそ以下の通りである。

朝鮮王朝実録は、朝鮮王朝の広範な記録を体系的に編集したものであり、それ自体が歴史書であるとともに、朝鮮史研究の主要な史料である。実録の性格について三つのコンセプトを検証したい。①実録は書物か記録か?、②前近代社会における登録システムとしての実録、③国家アーカイブズとしての実録。

①実録は公に読まれ販売されるために編集・出版されたのではなく、文学や学問の作品でもない。宮廷史家は彼ら自身の事実の集積や彼ら自身の歴史叙述にコメントを加えるので、ローマにおける日々の宮廷ジャーナリストのそれと同じように、「彼らの学者仕事」の結果は概念的には記録でもある。

印刷形式による実録の出版も近代のそれとは決定的に意味が異なる。それは、重要な国家の記録を保存し、その安全な保存のためのいくつかの保管庫に同じ印刷物を分散配置するための方法であった。

②前近代社会では、資料の異なったサイズを整理し、利用しやすく蓄積するために記録を登録することが一般的である。事実、編纂事業に参加する宮廷史家は自らを「編纂官」と呼んでいた。他方、記録のヒエラルヒシユな



仕組みがあった。実録はヒエラルヒーの頂点に位置した。実録は中世の登録された記録の一種であり、記録世界における最高位の記録である。編集過程を通じて、最も重要で価値のある記録は、実録の部分部分となるべく選択された。この過程は現代記録の評価選別に相当する。

③実録は、永遠のアーカイブズとして都から遠い山間部にある4ないし5の「史庫」に保存された。理論的には、このアーカイブズは、例えば次の王朝の人々、つまり未来における継承者にのみ利用可能であった。朝鮮王朝のアーキビストである権威ある宮廷史家を除いては、誰も当時このアーカイブズにアクセスし読むことはできなかった。

したがって、実録は、登録システムにおける最高の信頼しうるアーカイブズである。実録は、韓国のアーカイブズの伝統のシンボルであると同時に、人類活動の記録化への普遍的な人類の願いのシンボルでもありうるのである。

この内容は、実は昨年12月に立教大学で行われた国際シンポジウム「近世アーカイブズの多国間比較」における金炫榮氏(国史編纂委員会)の報告「文書・記録そして‘休紙’:朝鮮時代における文献の伝存様相」と非常に似通った内容である。韓国における史料学研究の趨勢をあらためて確認することができたわけだが、それにしても実録のような編纂物を、史料保存システムという意味でのアーカイブズであるとするのはかなり大胆な発想である。かなりの違和感があったが、こちらはこちらで準備することとした。私自身の報告で気を付けたことは以下の通りである。

- ①日本の伝統的(前近代)文書管理の特質を、「家」と官僚制的組織の二つの側面から説明する。
- ②検討の対象を原文書管理に限定せず、筆写分類編集や歴史編纂(叙述)にまで広げ、過去情報として一括して取り扱う。
- ③情報管理に問題をととどめず、利用の問題に踏み込む。

特に、②は、アーカイブズを情報管理の一形態としてとらえようということである。この視点は脱保管post-custodial時代のアーカイブズ学から学び、情報形態にとらわれずに検討の対象を広げようとするもの

である。朝鮮王朝実録の報告があることを念頭におくと、前近代日本の編纂の話は報告に含まれている必要があると思ったことも理由の一つである。ただ、呉氏との違いは、私の場合は、原文書管理と編集・編纂を区別して捉えようという伝統的な立場を堅持しているということである。

### ■報告当日

さて、前日会場に行ってみると、セッションの数は100か200か、参加者も2000から3000人であろうか。これほどの規模の学会に参加するのは、アメリカのアジア学会以来である。知人にも約束がない限り会うことは偶然に期待するしかない。報告するセッションの場所も200人のホールで、パワーポイントを投影する大画面が三つもある。こんな立派な会場で報告するのは初めてと思いき、緊張感が高まった。しかし、午前8時半という時間帯が災いしてか聴衆は30人ぐらいつちこちまるとしたセッションとなった。それでもアジア系の多様な風貌の人々が集まってくれた。欧米系の顔が見えないのはやむをえないでしょう。

Dr. Siは残念ながら不参加で、李氏が代読した。その内容は前半が朝鮮王朝時代の文書類型の説明であったので、2000年度当館客員教授崔承熙氏(チェ・スンヒ、当時ソウル大学教授)の5回に亘る朝鮮古文書学の講義が懐かしく思い出された。

呉氏の報告は、趣旨はオブストラクトと同じであった。

三番目がいいよ私の番である。おおよそ以下のような話をした。なお、英文フルペーパーが前記アドレスに今のところは掲載されている。

まず、私自身はあまり承知していない古代・中世における過去情報管理に関しては以下のようにまとめたが、当日は時間の関係で割愛した。その結論部分は以下のようなものである。

日本は官僚組織を中国・朝鮮から学び、実現させたにもかかわらず、科挙を採用しなかったために、①官僚制が形骸化し統治機構が家に依存するようになった点、②科挙に裏打ちされた制度的な文人層が形成されず、武家政権が成立した点には、東アジアの異端性を見て取ることができる。その一方では中国文化圏にあっ

たので、全国政権は歴史を編纂するという意識が存在したという点では東アジアに共通な性格を持っていた。このことは過去情報の蓄積方法が原文書管理だけではないという素地を生み出したものと思われる。

次に、日本近世の統治組織における情報の管理と利用についてであるが、当日はここから話し始めた。

日本近世(江戸時代1603-1868)の統治組織は、幕府も藩もそれ自体が擬制血縁の組織の形態をとっていた。その内部も家臣(家臣の家の当主)によって構成されていたので、日本近世の統治組織は家の入れ子構造になっている点が特徴的である。

上記の特質に規定されて、情報・文書管理にはいくつかのパターンが存在する。

- 1.官僚制的に行われる場合
- 2.官僚制的管理を機軸としながらも家が補完する場合。
- 3.家が機能する場合。

このパターンはそれぞれの組織の長の屋敷と役所の関係、スタッフの性格と照応している。すなわち、勘定所は純粹に役所であり、その長である勘定奉行は自分の屋敷に居住している。また、勘定所の吏員(武士)は勘定奉行と直接の主従関係にはない。二番目の町奉行所には町奉行の公邸が含まれているので就任期間中はそこに居住する。その吏員(武士)は世襲で町奉行所に勤めているのでここでも町奉行とこの吏員との間には直接の主従関係にはない。ただし、町奉行就任者の家臣数名が町奉行所の業務に従事する。三番目の寺社奉行には役所も公邸もないので、自分の屋敷で業務を行う。その業務は専任のスタッフではなく寺社奉行就任者の家臣が全ての業務を担う。

過去情報蓄積の二つの観点、原文書管理と筆写分類編集という点ではどうであろうか。幕府や藩の政治は18世紀以降裁判も行政も先例に基づいて行われたため、蓄積された過去情報を利用することが不可欠であった。幕府の諸部局では、もちろん原文書管理も行われてはいたが、基本的には筆写編集されたものの利用が主軸であった。そのため、1730年代以降、法令集の編集、行政先例集の編集が、組織的継続的に幕府が滅亡する1868年まで行われていた。

歴史編纂に関しては、幕府でも藩でも江戸時代を通じてさかに行われていた。その際には、東アジアにおける歴史編纂の伝統が常に念頭にあった。幕府は、19世紀に入ると徳川将軍家の歴史編纂を意図し専門部局を設置して1843年に完成させた(徳川実紀)。つまり制度化された編纂部局は18世紀には存在しなかったこと、また、この本が現将軍、および幕府の創始者を神格化して祀る日光東照宮に献呈されたことは、朝鮮王朝実録の編纂・保管システムと比べると、公平な歴史の記憶を次代に継承させようという意識が相対的に低かったことを示しているように思われる。実録が未来志向であるのに対し、実紀は明らかに過去を向いているのである。

報告の後半は、日本近世の被統治組織における情報の管理と利用について概観した。

村という農村部の地縁団体や、町(ちょう)という都市部の地縁団体、商職人の同業組織は、全て家長が構成員であった。したがって、近世文書は、地縁団体・同職団体が現在まで文書を伝来させる例も珍しくはないが、多くは家文書という形で現存する。

被統治組織の保有文書は断片的なものではなく、大量かつ体系的である。それぞれの文書管理は独自の体系性を持っていたので、日本近世は、統治組織の上部から、被統治組織の末端まで、幾層にもわたって体系的な過去情報の蓄積が行われていた。

それは、統治組織の統治が、一方的な強制ではなく、当事者の意志を支配秩序の範囲内では尊重するという基本姿勢のもとで行われていたことの前提となった。当事者の意志も体系的に蓄積された過去情報に基づくという一定の合理性を有していたのである。

管理していた文書を根拠として、村・町・仲間組織・商人は自己の権利を主張した。そのため、証拠文書は特に重要視され、特別な保管庫を建設する場合もあった。播州三木町では「宝蔵」と呼ばれる証拠文書保管専用庫が17世紀末に建設された。三木町で現在でも行われている、近世において証拠となった重要文書の虫干し行事は、「宝蔵」の建設と前後して開始され、単なる虫干ではなく、共同体の人々が過去を想起する「記憶の場」で

もあった。儀礼行為を通じて文書の保全が図られたことがわかる。

しかし、権利主張のために証拠文書を改変したり、証拠文書に書いていない権利を主張して証拠文書を神格化して秘匿したりするという非合理性も日本近世の人々は併せ持っていた。そうした非合理性の方向で歴史叙述が行われるとき、荒唐無稽な神話が生まれ、拡大再生産される場合もあった。

日本の近世は、東アジア考証学が農村の知識層にも浸透し、合理的実証的態度が普及する一方、それとは別個に過去に対する豊かな想像力を口承ではなく文字のレベルでも失うことのない世界でもあった。

このことは、中国徽州村落における地誌が、おそらくは王朝における正史編纂の伝統を受けて、記述事項が定型化され原文書の引用を中心としており、荒唐無稽な神話が叙述される余地がないらしいことと対照的である。この差は、科擧の有無による在村知識人の性格の違いも一因であるのかもしれない。ともあれ、こうした点にも日本の東アジアにおける異端性すなわち辺境性を見ることができるともかもしれない。

以上の報告の基調は、前近代においては東アジアの文化的正統性はあくまでも中国にあり、その最も忠実な継承者が朝鮮王朝であって、そうした基準からすると日本はかなり外れたことをやってきた、というものである。そのことが文書管理や編纂にも現れているということが言いたかったのである。

最後の徐氏の報告は、前半が清朝文書の代表的な文書類型の紹介であり、後半がジェンダー史の発表であった。

このように、アーカイブズ史ではない報告が混じってしまうことは各国の研究状況の差異による。韓国では歴史史料(群)それ自体をアーカイブズ的な観点から分析する研究はまだ始まったばかりである。中国ではおそらくそのような研究は行われていないのではないかと。この4年間のプロジェクトから得られた感触どおりの結果に、今回のセッションもなっていたように思う。

というわけで、セッションの趣旨に最も適合していたのが呉氏と私の報告であったのである。1時間で4人も報告したために、半ば予想していた通り質疑の時間は

なくなってしまった。この点はとても残念であったが、報告後にクアラルンプールで考えたことは以下の通りである。

今までに、朝鮮王朝実録に関する報告を二度聞いたことがあり、今回もそうだったわけだが、実録を称揚してしまう姿勢に疑問を感じてきた。実録にのみ関心を向けるのではなく、「承政院日記」など王朝政府の各組織の記録なども含めて、そこに出てくる文書名を地道に拾い上げ、機能や保管場所をさぐり、現存はしていない文書の世界を可能な限り復元してみる研究姿勢が重要なのではないだろうか。実録をもっと相対化すべきなのではないか。

ただ、思考の最後には、呉氏と私の共通性に思い当たった。アーカイブズの歴史を考えると、検討対象を狭く限定しないという点である。それは、現在のアーカイブズ学が、電子情報化社会を迎え、記録=現用、アーカイブズ=非現用という二分法を越えて革新されようとしていることの反映なのであろう。

ついでにいえば、私の場合は、原文書と編集を区別したがるのであるが、それは実証的歴史学というディシプリン(学問)のまさにディシプリン(訓練)に捕らわれているだけなのかもしれないと思った次第であった。この点についてはこれからも考えなければならない課題である。

セッションを主宰された韓国国家記録院の李氏、報告者の一人である忠北大学の呉氏、それに中嶋氏をはじめとする国立公文書館の方々に深く感謝申し上げたい。



# オランダと日本 — 文化的〈対話〉の軌跡 —

The Netherlands and Japan The trajectory of a cultural dialogue

人間文化研究機構連携研究 日本とユーラシアの交流に関する総合的研究「文化の往還」

オランダ日本交流集会 入口敦志(国文学研究資料館 助教)

日本とオランダとの文化交流は、既に400年近い歴史をもっている。特に江戸時代にあつては、長崎出島をとおして西洋諸国では唯一交易を行ってきた国であることはいまでもないだろう。そのゆかりの深いオランダのライデン市ライデン大学国際会館において、平成20年6月16日と17日の2日間、標記シンポジウムが開催された。2日間のプログラムは下記の通り。

6月16日(月)

開会挨拶 マックス・スバレボーム(国際アジア研究所)

伊井春樹(国文学研究資料館)

研究発表1 司会:谷川恵一(国文学研究資料館)

1. 伊井春樹(国文学研究資料館)  
「海外へ発信した日本の情報—明治日本の姿—」

コメント:イフォ・スミツ(ライデン大学)

2. 大高洋司(国文学研究資料館)  
「日本化する『水滸伝』—在ライデンの資料を出発点として—」

コメント:ウイレム・ヤンボート(ライデン大学)

研究発表2 司会:前川愛(総合地球環境学研究所)

3. イフォ・スミツ(ライデン大学)  
「譬喩画(エンブレム)と司馬江漢:イソップ寓話の変容」

コメント:伊藤鉄也(国文学研究資料館)

4. ダーン・コック(ライデン大学)  
“The Bibliographical Challenges posed by Kyokabon”

コメント:紅林健志(総合研究大学院大学博士後期課程)

6月17日(火)

研究発表1 司会:前川佳遠理(国文学研究資料館)

5. 木戸雄一(国文学研究資料館)  
「訳語から合言葉へ—訳語「本能」の来歴—」

コメント:キリ・パラモア(ライデン大学)

6. コース・コイベル(ライデン大学)  
「ホフマン教授のコレクションについて」  
コメント:木村裕樹(国文学研究資料館)

研究発表2 司会:大高洋司(国文学研究資料館)

7. 佐々木利和(国立民族学博物館)

- 「在ライデン・アイズ絵をめぐって」  
コメント:江沢あや(ライデン大学)
8. アンナ・ペーレンス  
“Prosopography as a research method for the early modern Japan”  
コメント:入口敦志(国文学研究資料館)
9. パネルディスカッション・総合討論  
「オランダと日本—より深い文化的〈対話〉を目指して—」  
司会:ウイレム・ヤンボート(ライデン大学)  
ディスカッサント  
ハンス・カイパース(シーボルト博物館)  
谷川恵一(国文学研究資料館)  
小長谷有紀(国立民族学博物館)



文化的〈対話〉をなりたいための材料として、なにが集められたのかということを検討することは重要なことであろう。たとえば、シーボルトのおびただしい収集品は、日本からオランダにもたらされた文物としては最重要の品々である。パネルディスカッションにおいてシーボルト博物館館長ハンス・カイパースによるコレクションについての報告があった。幸いカイパース館長自らの案内によりシーボルト博物館でその一端に接することができたが、現物を収集することはもちろん、写真もコピーもない時代に建物や墓石などの巨大なものには絵画化したり、あるいは精巧なミニチュアを作らせて持ち帰るという徹底ぶりには、今更ながら驚かされた。そうして持ち帰

られた“標本”としての物が、ヨーロッパにおいて日本像を形成するにあたり大きな意義をもっていたであろうことは想像に難くない。現代に生きる日本人にとっては、すでに失われた過去の日本を想起するための格好の材料でもある。これは、おそらくシーボルトという〈他者〉をとおして見ることになるために、ある程度の客観性と細部の再現性をもつことになるからであると考えられよう。当事者である当時の日本人は、このようなものを残そうなどとは思えないあたりまえの物ばかりであり、それ故に湮滅してしまった例も多い。

〈他者〉という言葉は、二日目のパネルディスカッションにおいて、小長谷有紀によってこのシンポジウムをくぐるキーワードとして提示された。物としての資料の往還ではなく、資料そのものに内在する他者性、を読むべきではないかという問題提起もあった。コース・コイベルによって紹介されたライデン大学のホフマン教授のコレクションや、大高洋司の報告で触れられたライデン国立民族学博物館に所蔵されている『絵本水滸伝』『水滸画伝』なども同様に〈他者〉によって集められた物である。ホフマン教授は『日本文典』の著作で知られる学者でもあり、中国文献の書誌学研究に貢献し膨大な中国文献のコレクションをもたらしたライブラリアンとしての一面をもっていた。

シンポジウム1日目の午後、参加者全員で Bibliotheca Thysiana を見学する機会を得た。この図書館は17世紀に形成された図書群を当時の建造物のなかでそのまま保管しているという、他にはない特徴を持っている。冒頭に触れたシーボルトやホフマンによる集書や収蔵品は、学術的な目的のための、ある意味恣意的なコレクションであるために、一般的な西洋人の東洋への興味とは大きく隔たっている側面も否めない。それゆえにこの図書館の蔵書に含まれる中国や日本の書物は、点数は少ないが、17世紀当時のオランダ人のごく普通の東洋への視点を物語るものとしてかえって貴重であり、興味深いものである。シーボルトのコレクションのような特殊なものだけでなく、一般的なコレクションの中にある一般的な視点を



無視しては、深い意味での文化的〈対話〉はわからないのではないだろうか。

では、日本人はどのように他国の文化と対話してきたのであろうか。



日本人は西洋文化との接触が始まって間もないころから、すでにイソップ寓話を受容していた。宣教師による天草版にはじまり、古活字版・絵入整版本と室町時代末から近世初期にかけて次々に出版されており、親しまれていたことがわかる。そういう前提のもと、イフォ・スミツは、司馬江漢が西洋の「譬喩画(エンブレム/シンネパール)」における金言・絵・警句の三要素を用いて、『訓蒙画解集』を刊行したことを紹介した。江漢が受けた直接の影響は、スミツの指摘するとおり西洋の譬喩画であることは確かだが、中国にも同様の形式のものが古くからあるのではないかという指摘もあった。イソップ寓話に関しては、谷川恵一により、『通俗伊蘇普物語』など明治以降の翻訳の例なども紹介された。また、谷川は『政体新論』における「政体」「立憲」「民権」などの訳語の問題に触れたが、これは木戸雄一の「本能」という訳語に着目した発表を受けてのものであった。

木戸によれば、西周によって「instinct」の訳語として造られた「本能」ということばが、その後高山樗牛の「美的生活論争」において恣意的な意味を付与されて流布するようになったという。その間、辞書では他の英語の翻訳語とされることもあったようで、漢語の表意性ゆえの意味の揺れがあったことが紹介された。誤読ということではないであろうが、外国の概念を採り入れるにあたっての恣意性ということが問題となる。同じ漢語が日中で違う意味を持つことがあることなどを考え合わせると、対話の難しさが明らかになってくるであろう。

そのような例は言語の面だけにあらわれるわけではなかった。日本で絵本とし

て刊行された『絵本水滸伝』『水滸画伝』は、日本人が〈他者〉として中国をどう見ていたかということを示している。そこに見られる日本的な読みかえ方が、その後現れる『〇〇水滸伝』という日本化された『水滸伝』の萌芽を含んでいるという大高の指摘は、〈他者〉としての日本人が、水滸伝の中に日本的なものを投影して読んでいたことを明らかにしていて興味深い。

大高によって提示された「現実を相対化する別世界であった」中国ということが、オランダとの文化的な関係においても言えるのかという問いかけに、ウイレム・ヤンボートは言えるのだという回答を示した。日本が伝統的に採り入れてきた中国の医学が、18世紀にオランダの医学の精確さによって相対化されたことなどを例として、オランダを鑑として日本のあり方を改革する必要性が説かれるようになったことが指摘された。

ダーン・コックによる狂歌本についての分析と、アンナ・ペーレンスによる日本の文人研究には、〈他者〉の日本文化を分析する方法論そのものが、日本人の研究者に様々な刺激を与える可能性があることを実感する発表であった。コックは狂歌本の収集における、オランダと日本の質の違いを指摘し、また、狂歌本の分類案を提示するという概括的なもの。ペーレンスはプロソボグラフィという新しい方法を日本の文人研究に応用した。日本での文人研究では、和歌に関しては和歌だけの、俳諧については俳諧だけの人物関係を取り上げることが多く見受けられる。しかしプロソボグラフィとは、ある人物を中心に、直接の関係はないにしても、その友人や師弟などの関係をたどり、公家から職人、農民におよぶ大きな文化的な集団を指定し、その総体で文人というものを考えてみようという試み。両者に共通するのは、細かい事象の掘り起こしをしながらも、大きな流れの中に位置づけていくという点である。

以上は、文化の往還を受容する側から分析したもの。一方往還には発信する側の問題もある。そこに注目し、写真というメディアを使って明治の日本の姿を海外に発信した小川一真をとりあげたのは伊井春樹である。本来その文化のなかで生活している当事者が、他者の目を意識してつくった写真集。例えば、浮世絵

にみられるようなポーズをとった人物写真など、西洋人が欲している姿を提供している点にそのことが如実にあらわれている。

佐々木利和によるライデンにあるアイヌ絵の紹介は、単なるアイヌ文化への言及にとどまらない。アイヌ民族を日本の先住民民族であると位置づけたうえで、これからのアイヌ研究のあるべき姿を具体的に提言する。文化の往還、あるいは文化的対話といった場合、多くは日本と外国との間での問題としてとらえがちであることは、今回のシンポジウムにおける多くの報告がそうであることからよくわかる。しかし、佐々木による提言は、国内においても文化的対話、文化の往還という問題は語られうるのだという先鋭な問題意識をつきつけてくる。今後我々はその提言にどう答えていくべきか。

上記の報告の通り、本シンポジウムにおいては多岐にわたる問題が〈対話〉〈往還〉というテーマにそって有機的に連関し成果をあげることができたと評価できる。一方様々な課題が浮き彫りになってきたことも確かであり、今後より一層の対話と研究の深化が期待される。



## 第1回日本古典文学学術賞の受賞者決定

8月11日(月)、竹橋のKKRホテル東京において、人間文化研究機構国文学研究資料館賛助会による第1回日本古典文学学術賞授賞式及び記念パーティーが開催されました。

まず16時から10階「瑞宝の間」で行われた授賞式では、鈴木淳当館副館長兼賛助会運営委員会委員長による開式の言葉に続いて、伊井春樹当館館長の挨拶があり、これまで若手研究者の奨励育成を目的とする日本古典文学学会賞を主催してきた財団法人日本古典文学会が平成19年2月に解散した際、その資産の寄付を受けた国文学研究資料館賛助会が、日本古典文学学会賞を引き継ぐ形で新たに日本古典文学学術賞を設けることになった経緯について説明されました。

次に日本古典文学学術賞選考委員会の渡辺泰明委員長により、今回の受賞者として沖本幸子氏(青山学院大学総合文化政策学部准教授)・北村昌幸氏(関西学院大学文学部准教授)の2名を選考するまでの経過が報告され、また受賞の対象となった沖本氏の著書『今様の時代——変容する宮廷芸能』について選考委員会を代表して落合博志委員の講評、北村氏の論文「足利尊氏の変貌——『太平記』巻十四の本文改訂をめぐって」ほかについて同じく小峯和明委員の講評がありました(講評は下記に掲載)。次いで式の中心に移り、渡辺選考委員会委員長から2名の受賞者に賞状と賞金が授与された後、受賞者による謝辞が述べられました。沖本氏と北村氏の謝辞は、それぞれの研究対象への愛着と研究に向かう姿勢を明確に語る内容であり、日本古典文学の研究が若い世代によって今後も着実に受け継がれていくことを確信させるものでした。

続いて17時から、会場を11階の「孔雀の間」に移し、記念パーティーが開かれました。パーティーには旧日本古典文学学会関係者、過去の日本古典文学学会賞受賞者、学会関係者、受賞者の指導教員や友人出版関係者などが多数集まり、寺島恒世当館教授の司会のもと、久保田淳旧日本古典文学会理事長による乾杯

の辞を承けて一同唱和して乾杯した後、窓外に皇居のお堀を望む広く明るい空間で、受賞者を囲みつつ和やかな懇談の時を過ごしました。途中、受賞者と縁の深い方々による祝辞をいただき、最後に渡辺選考委員会委員長の閉会の辞をもって、18時30分、盛会のうちにお開きとなりました。

有望な若手研究者の前途を祝すために多くの人が集ったこの授賞式と記念パーティーは、国文学における研究者コミュニティの確固たる存在をあらためて実感させるとともに、当館と研究者コミュニティとの繋がりをより強めるという点でも極めて意義深いものでした。

## ●古典文学学術賞選考講評



沖本幸子氏

『今様の時代——変容する宮廷芸能』  
(落合博志 国文学研究資料館准教授)

沖本幸子氏『今様の時代——変容する宮廷芸能』(平成18年2月、東京大学出版会刊)は、今様に耽溺した後白河院と今様の関係を中心として前後の歴史を加えた三部構成を取っている。

まず「第I部 今様、宮廷へ——白河院の時代」では、民間で生まれた今様が宮廷に流入してくる過程について、今様名手と貴族との交流を示す資料に基づきながら跡付けるとともに、特に白河院やその皇女令子内親王、摂関家の藤原忠実といった宮廷中枢の人々の今様愛好が、宮廷芸能の中に今様が確たる位置を占めることに大きく与ったと説く。

また「第II部 後白河院の今様」では、異常なまでに今様を愛した後白河院が、今様をほとんど信仰の対象としていたことにつき、今様の持つ力、特に声の力に注目し、院の熊野信仰と今様修行との共

通性を指摘する。そして後白河院が青墓の傀儡子の今様を正統としたことに関して、傀儡子が秘曲とした「足柄」に焦点を当て、足柄という土地や足柄明神の性格から傀儡子と「足柄」の曲の関係を考察する。また『梁塵秘抄口伝集』の分析と女性が声を出して歌うことがタブー視されたことを踏まえ、後白河院の「声」に対する感覚と思考を探り更に今様の喚起する身体性に説き及ぶ。

次いで「第III部 歌から舞へ——後白河院以降」では、まず今様に熱狂した後白河院の歿後、淵酔など宮廷の宴席で歌われる今様が固定化していったこと、それと並行して今様の家が成立・固定したことを跡付ける。その一方で、今様が本来持っていた散楽のエネルギーを引き継ぐものとして、五節の淵酔の乱舞において、平安末期から白拍子・乱拍子という拍子を重視する舞う芸能が新しく登場し、更に「物云舞」という芸能も生み出されたこと、天皇の警護役である滝口の武士が日常儀礼の中で乱拍子を舞うなど新たに芸能者化したことについて論じ、鎌倉初中期を中心とする宮廷の芸能熱とその背景について考察している。

本書の三分の二は既発表論文に基づいているが、単なる個別論文の集成ではなく、通史としても読めるよう配慮されており、今様を中心にして宮廷芸能の歴史に一つの流れを付けたものと言える。さまざまな芸能が交差する殿上の淵酔、特に五節の淵酔という場を通して今様が宮廷に流入し、また同じ場を母胎として今様を受け継ぎつつ新たな芸能が発生したことを、淵酔に現れる芸能の記事を詳細に検討して跡付けているのは中でも重要な成果である。個々の資料を繋げて論述していく際にも見るべきものがあり、これは選考委員会でも評価された点の一つである。

一方で本書に関しては、今様作品自体の具体的分析が全体の記述量に比較して少ないこと、今様と身体の間わりを論じた部分で立脚している身体論が古いこと、などを指摘する意見もあった。また、後白河院が傀儡子を今様の正統性の拠り所とした理由のように試論の域を出



ない所、既存の学説の紹介や先行研究のまとめ直しに止まる部分もある。基本的に、史料の分析に基づいた手堅い方法ながら、所説にはまま異論を挿む余地もあり、更なる論証を要する荒削りな記述も見られることは一言しておかなければならない。本書では行われなかった後白河院と今様の関係についての芸能史的観点からの考察とともに、課題を残す点と思われる。しかし、それらは沖本氏自身の今後の研究の中で乗り越えられることが期待されるものであり、氏にはそれを果たす十分な力があると信ずる。

やや批判に流れたが、もとより本書には注目・傾聴すべき新見も少なくない。その一々を挙げることはできないが、例えば第Ⅲ部において、白拍子・乱拍子という成立事情も芸態も不明確な芸能が、五節の淵酔で舞われることにより宮廷芸能として定着する見通しを示したことは芸能史研究上重要な意味を有する。そのように、歌謡に止まらず、身体芸をも視野に入れた考察がなされていることも本書の特長である。

以上、本書は今様を基軸として、古代末期～中世初期の宮廷芸能の研究に新たな水準を示した業績と評価することができ、選考委員会として今年度の日本古典文学学術賞にふさわしいものと判断した。



北村昌幸氏

「足利尊氏の変貌——『太平記』巻十四の本文改訂をめぐって」ほか  
(小峯和明 立教大学教授)

北村昌幸氏の当該年度中の業績は六点あるが、ここでは以下の三点を主対象とする。

- ①「足利尊氏の変貌——『太平記』巻十四の本文改訂をめぐって」武久堅編『中世軍記の展望台』和泉書院 平成18年7月
- ②「讒言失脚説話の連鎖とその志向——『北

野天神縁起』から『太平記』へ」小島孝之編『説話の界域』笠間書院 平成18年7月

- ③「『梅松論』における「異朝」——『太平記』との比較を通じて」『日本文芸研究』59巻2号 関西学院大学日本文学会 平成19年9月

まず①の論文では、複雑な流動過程をもつ『太平記』諸本を対象に、とりわけ諸本間で異同のおおきき巻十四をとりあげ、本文改編の要に足利尊氏の形象があることを論ずる。なかでも特徴的なテキストが天正本であり、神田本他の諸本との比較を通して、天正本が武家政権の確立にふさわしく、自発的、積極的に行動する意志的な尊氏像を描き出していることを浮き彫りにし、天正本の後出形態の特性として位置づけようとする。本文の微細な分析と巨視的、大局的な考察とを自在に交差させて論じており、乱世批判を盛り込みつつ物語としての太平記世界を補完し、整合性をもつ天正本の特性を鮮明に位置づけている。

②の論文は『太平記』巻十二にみる内裏火災の先例としての菅原道真(天神)の崇りをめぐって、『北野天神縁起』を典拠に語られる引用の諸相を論ずる。『太平記』が用いた『天神縁起』は、承久本以下の甲類に近いとする定説を追認しつつ、『太平記』には、『天神縁起』の醍醐帝と道真をそれぞれ後醍醐帝と護良親王とに類比させる意識が濃厚であることを明らかにし、『太平記』が独自の物語論理によって『天神縁起』をたくみに取捨選択している引用の様相を具体的に分析し、引用の隠された究極の目的が後醍醐批判にあるのではないかとする。故事説話の引用が表向きは内裏再建のいわれを説くのに対して、内実は無実の流罪、讒言による転落の先例を提示する、という複合化された機能をもつことを解明した点、特に注目されよう。

③は『梅松論』における中国故事のあり方を『太平記』と対比させて分析する。『太平記』が呉越合戦譚を引用して越王勾践と後醍醐帝を類比させるように、中国故事を本朝内乱史とたくみに共鳴させて物語っているのに反し、『梅松論』は故事を意識しつつも、それとのずれや心理的な距離を表明しており、故事引用態度に明らかな差異をみせているとする。さらには時として異朝軽視への傾斜を

らみ、逆に本朝史は過剰な叙述を招き、中国と日本とに一線を引こうとする姿勢をうかがわせるともいう。未曾有の南北朝の内乱をとらえた同時代の歴史叙述である『梅松論』と『太平記』との引用の差異が鮮明に切り出されている。

以上のように北村氏の論は、『太平記』や『梅松論』を中心に諸本の表現志向の差異をはじめ、故事説話や縁起類の引用の位相差を精緻に読み解き、解析する方法で一貫しており、周辺の関連資料や事象に目配りをきかせた周到さを持ち、かつ粘り強く柔軟で緻密な論を展開し、説得力をもちえている。『太平記』の表現の力学をめぐる一連の論考としておおいなる可能性に満ちているといえる。とりわけ当該年度において、六点もの論考を書いた力量も評価されてしかるべきであり、今後の軍記、説話研究に益するところが大きいと判断される。よって、本選考委員会は、北村氏を古典文学学術賞授賞に値すると認めるものである。

※国文学研究資料館賛助会では、財団法人日本古典文学学会が行っていた「日本古典文学学会賞」の事業を継承し、若手の研究奨励と人材育成を目的とした「日本古典文学学術賞」を新たに制定いたしました。40歳未満の若手研究者を対象とし、賛助会に置かれた日本古典文学学術賞選考委員会において、旧日本古典文学学会賞受賞者を含む過去の受賞者からの推薦及び選考委員からの推薦に基づいて、候補者の選考を行います。選考委員の構成は、関連諸学会からの推薦者5名(現在は上代文学会・中古文学会・中世文学会・日本近世文学会・和歌文学会からの推薦者各1名)、旧日本古典文学学会賞選考委員2名、国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長1名、国文学研究資料館教員1名、選考委員会が必要と認めた者若干名となっています。

平成20年8月発表を第1回とし、以後、毎年6月に発表と授賞式を行うこととしています。なお、第1回に限り平成18年1月から平成19年12月までの2年間の業績を対象とし、第2回以降は前年分を対象とします。

※日本古典文学学術賞選考委員会委員(任期:平成20年3月～平成22年2月)

渡部泰明(東京大学大学院教授)【委



員長】、猪狩友一(白百合女子大学教授)、板坂耀子(福岡教育大学教授)、落合博志(国文学研究資料館准教授)、神田龍身(学習院大学教授)、神野志隆光(東京大学大学院教授)、小峯和明(立教大学教授)、鈴木淳(国文学研究資料館副館長)、延廣眞治(帝京大学文学部教授)、三角洋一(東京大学大学院教授)

#### 選考経過

第1回選考委員会は、平成20年3月11日、国文学研究資料館において、8名の委員の出席のもとに開催された。互選により渡部泰明氏が委員長に選任され、まず、選考要綱及び今回の選考方針につい

での確認と決定が行われた。また、旧日本古典文学会賞受賞者から推薦のあった19名の候補者が示され、これに選考委員の推薦する候補者を加えることを申し合わせて散会した。

第2回選考委員会は、平成20年5月13日、同所において、8名の委員の出席のもとに開催された。前回の委員会以降に推薦書が届いた2名と、選考委員推薦の2名を加えた23名の候補者の業績につき慎重に検討を行い、このうち9名を最終候補者とすることを決定した。

第3回選考委員会は、平成20年7月22日、同所において、9名の委員の出席のもとに開催された。欠席の委員からは、書面で意見が提出された。前回最終候補

とされた9名の候補者の業績につき、論証の確かさ、独創性、将来性の豊かさ、視野の広さ、論文の文体など、さまざまな角度から活発に議論が交わされた。結果として、とりわけ評価の集中した、沖本幸子、北村昌幸の両氏を、第1回日本古典文学学術賞受賞者とするのを、選考委員全員の合意のもとに決定した。

## 子ども見学デーの報告

小学生を対象とした「子ども見学デー」を8月27日(水)に開催しました。

国文学研究資料館の「子ども見学デー」は、平成16年度から実施しているもので、今回が5回目。本年3月に品川区から立川市に移転した後、初めての開催となりました。

今回は、立川第十小学校のサマースクールの一環として、小学生、小学校の先生及び保護者約20名が参加しました。伊井春樹館長の挨拶の後、当館がどのような研究をしているかを見てもらうための館内見学、休憩を挟み、山下則子教授の「百人一首の話」の後、カルタ取り大会を行いました。

館内見学では、館長室、研究室、閲覧室及び展示室などを見て回り、子ども達は研究室や閲覧室での本の量の多さに驚き、展示室では、現在展示している錦絵の複製を見学しました。

「百人一首の話」では、百人一首の成り立ちや、色々な種類のカルタの紹介があり、その後のカルタ取り大会では、当館外から講師を招き、昔の装束で、宮中歌会始めと同じ読み方で百人一首の和歌を読んでもらい、子ども達は熱心に取り組みました。



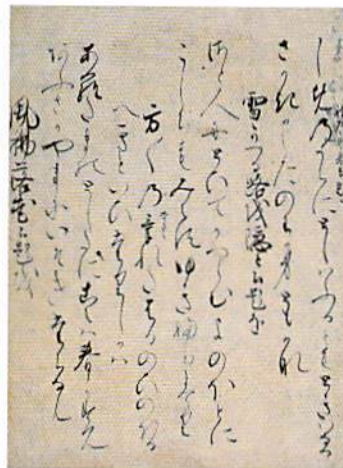


## 新収資料紹介 古筆手鑑 (ラ 3-27)

このたび当館に初めて古筆手鑑が収められました。縦36.1×横24.0cmの折帖一帖、全12折。オモテ面に39葉、ウラ面に37葉の古筆切・短冊類を収める。当館が所蔵するのに相応しく、資料的価値の高い断簡が何葉も貼付されています。

図版に掲げたうち右上の断簡もそのひとつです。今日これと一致する作品は存在していませんが、実は2首目が和歌一字抄では賀茂成助詠となっています。すると想起されてくるのは、従来たった1葉のみが知られていた伝後光厳院筆・賀茂成助集断簡(徳川黎明会蔵手鑑「八雲」所収)の存在です。そこで両者を較べてみますと、まさしくツレたことが明らかとなります。すなわち図版の1葉は、平安時代後期の散佚私家集の内容を今に伝える、稀覯にして貴重な資料と認定できるのです。

ほかにも当該手鑑には、特筆すべき異本歌を持つ古今集の1葉や、南北朝期私撰集たる藤葉集の諸本の不備を補う1葉、また大鏡や和歌知願集などの断簡も見出せます。今後研究プロジェクトなどで大いに活用していく予定です。



## 立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」の開催

立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」を開催しています。

2008年(平成20年)は、『源氏物語』の名が初めて文献に現れる1008年(寛弘5年11月1日)から数えて1000年目に当たります。

この1000年間、『源氏物語』がどのような形で読み継がれて来たのかを、画帖・絵巻・写本・注釈書・翻訳書などを通して一望します。

※本展示は、当館の基幹研究「『源氏物語』再生のための原典資料研究」による研究成果です。

### ■主な展示(予定)

- 大島本『源氏物語』(古代学協会)【重要文化財】
- 陽明本『源氏物語』(陽明文庫)【重要文化財】
- 中山本『源氏物語』(国立歴史民俗博物館)【重要文化財】
- 源氏物語絵巻(天理図書館)【重要美術品】
- 源氏物語団扇画帖(当館蔵)※初公開
- 源氏物語古系図(当館蔵)※初公開

- 開催期間: 前期 平成20年10月4日(土)～10月16日(木)
- 後期 平成20年10月18日(土)～10月31日(金)
- ※10月17日(金)は展示替えのため、お休みします。

- 開催時間: 午前10時～午後4時30分



源氏物語団扇画帖総合巻[第一七帖]



## 総研大日本文学研究専攻 特別講義

暑い盛りの7月30日(水)、本年度第1回の日本文学研究専攻特別講義を開催しました。平成16年度以来毎年行っており、すでに12名の先生方のお願ひしてきております。院生のための行事ですが、専攻内の先生、またまったく異なる分野の第一線で活躍しておられる先生方のお話から、日頃向き合っている専門分野とは異なる刺激を受けることを目的として行っています。

今回は、落合博志准教授による「白拍子の芸能と伝承」、小平桂一総研大前学長による「宇宙の果てまで ―すばる望遠鏡プロジェクト20年の軌跡―」の組み合わせというプログラムを考えてみました。

落合准教授は、静御前や祇王・祇女に結び付けて語られることの多い「白拍子」の一般的な認識が、必ずしも十分でないことを指摘し、芸能としての白拍子のあり方について、白拍子舞の構造、装束、伴奏楽器、歌謡の形式と内容等、断片的な資料から、淡々と、しかし正確で生き生きとした白拍子像を立ち上げて行かれました。後半の説明では、近世前期の絵画資料が用いられ、能囃子の混入等、時代の変遷による混乱が見られることが良く分かりました。

小平先生は、日本学術振興会のお仕事で、ドイツのボンに赴任される前のお忙しい時間を割いてお越し下さり、1時間半、多くの画像を用いて分かり易く、未知の世界への興味をかき立てて下さいました。先生がハワイ、マウナケア山頂の「すばる大望遠鏡」の建設に力を尽くされたことは、様々な機会に耳にするところで、「すばる」が現在果たしている国際的な意義についてのお話も十分面白く拝聴したのですが、先生が、20年を費やされたというその過程を振り返りながらお示し下さったことは、研究者が、個人の夢を、どのように個を乗り越えながら実現して行くかということについての、この上ないモデルケースだったと思います。あくまでもご専門の天文学の立場から、全く分野の異なる日本文学を専攻する私共を鼓舞して下さいました小平先生に、改めて、心より御礼申し上げます。



### 総合研究大学院大学文化科学研究科 日本文学研究専攻大学院博士後期課程 入試説明会のお知らせ

日 時：平成20年10月11日(土)15時～  
場 所：国文学研究資料館  
問合せ：管理部総務課研究支援室教育支援係  
TEL:050-5533-2916

#### ■概 要

課 程:大学院博士後期課程

定 員:3名

研究体制:複数指導教員による教育・研究指導 [主任指導教員1名・副指導教員2名]

#### ■願書受付

平成20年12月5日(金)～12月11日(木)

#### ■選考方法

修士論文等の審査

面 接:平成21年2月4日(水)・5日(木)



## ● 試みの絵巻展のお知らせ

11月17日(月)～12月19日(金)まで 入場無料

絵巻物の展示は国立博物館等で大規模に催され、何時間も並んでご覧になった方も多いと思います。国宝や重要文化財も多く、それらいわゆる本物を見るのもとても価値のあることです。

しかし、今回の企画はそうではありません。模本を多く使った展示です。

レプリカが本物より価値を下げて縮小などが掛けられることが多いのに対し、模本は現物の原寸大の模写が基本で、しかも原色の復元にも取り組み、さらにはそこにオリジナルカラーを織り込むことがあります。

模本だからできることとしては、同じ場面を複数同時に展示できたりします。

今回展示する平治物語絵詞三條殿夜討巻と伴大納言絵詞第一巻には絵巻の三大火災といわれるうちの二場面があります。本物で鑑賞する場合はそこを開くしかありませんが、模本では複数の模写を開くことができます。火災の模写がいかに難しいか、ご覧いただければと思います。他にも合わせて25巻ほど展示する予定です。

模本では満足しない?本当でしょうか。これだけたくさんさんの絵巻をご覧になれば、かなりご堪能いただけるのではないかと思います。...  
並ばずに、ごゆっくりご鑑賞ください。



## ● 次号までの閲覧室の開室予定カレンダー

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

### 10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

### 11月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24	25	26	27	28	29

### 12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

## 表紙絵紹介

### 源氏物語団扇画帖 <げんじものがたりうちわがじょう>

国文学研究資料館蔵[99-12] 江戸前期写 手鑑一帖 三八・七×五〇・六センチ  
団扇(うちわ)型の源氏絵五四枚が貼られた手鑑帖である。漆塗りの木箱に収められている。外題・内題・箱書き・極め札などは存在しない。絵の形から、「源氏物語団扇画帖」と命名した。土佐光則の流れを汲む、江戸時代前期(一七世紀後半)の絵と推定される。新出・未公開の源氏絵である。保存状態も良好。

第5図 若紫巻[第五帖]

#### 【場面】

場所は北山(きたやま)の聖(ひじり)の邸。季節は春。光源氏一八歳。  
わらわ病治療のため北山を訪れていた光源氏は、柴垣(しばがき)のもと、美しい少女(紫の上)の姿に心奪われる。その少女は、「雀の子を犬君(いぬぎ)が逃がしつる」と言って泣きじゃくっているところだった。

#### 【図様】

柴垣のもとでのぞき見る男性が光源氏。その横でひざまづくのが惟光(これみつ)。邸内で、脇息(きょうそく)に寄りかかる尼削ぎ(あまそぎ)の女性は、紫の上の祖母。簀子(すのこ)の右端で雀を見やっているのが女房。その左の童女が紫の上。画面右上には、逃げた雀が飛んでいる。山には桜が咲き、水が流れる。

#### 【構図】

天理図書館蔵「源氏物語絵巻」をはじめ、源氏絵として古来最も頻繁に絵画化される名場面の一つ。



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成20年10月1日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館